米欧亜回覧

第６３号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

七月全体例会は二十三日、中村敦夫氏の講演「簡素なる国へ、政治をどうする！？」

七月の全体例会は、七月二十三日（土）、午後一時半より、プレスセンター九階の会議室で開催される。一部では会務報告など、二部は二時四十五分から中村敦夫氏を招いて講演を聞くことになった。中村敦夫氏は俳優、テレビキャスター、作家、参議院議員など多彩な経歴で著名であるが、本年四月、講談社から「簡素なる国」を出版された。新党「さきがけ」時代のキャリアも踏まえて、三・一一の大震災も視野にいれながら、新しい日本のビジョンを提言している。

たいへん時宜に適したテーマであり、国会議員としての経験も交えて、熱意ある貴重なお話が拝聴できると予想されるので、多数の会員の参加を期待している。また、会員外の出席者も歓迎であり、仲間や知人友人を勧誘してほしい。

ＮＰＯ総会に続きパネルディスカッション

全体例会開催、総会後に会員によるパネルディスカッション

五月八日（日）午後一時三十分より国際文化会館講堂において、年度替りのＮＰＯ総会を兼ねた全体例会が開催された。

第一部の総会は二〇一〇年度の事業報告と会計報告および二〇一一年度の事業計画、と収支計画、役員の重任などの発表と審議が行われた。

第二部として、「大災害から如何にして日本の再生をはかるか？」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、パネラーの永池榮吉氏、石坂芳男氏、塚本弘氏の会員三氏の討議と質疑で、熱心な意見交換が続いた。

（詳細は二・三頁）

文化庁長官・近藤誠一氏を招き大盛会

グローバルジャパン研究会では、六月一日、国際文化会館で、文化庁の近藤誠一長官をお招きして講演会を行った。筑波大からの学生十名を含む五十五名が参加し、溢れんばかりの盛況となった。周到に準備された資料を映像で投影するなど、極めて充実した内容で感銘を与えた。質疑応答とも活発に行われ、その後のワインパーティでも歓談がすすんだ。

（詳細は五頁）

先の総会において、当会設立十五周年を記念した「小論集」の編集発行決定

当会設立十五周年の記念事業として、会員による記念小論集を作ることになった。

今までの研究資料・発表論文などを素材とした部会活動の集大成とするだけでなく、新規の論文も加える企画である。編集委員には、山田哲司、小野博正、岩崎洋三、中山進、小松優香の各氏が委嘱され、五月二十七日、第一回の会合が開催された。会員の多数の応募を期待している。

（詳細は三・四頁）

「モアモア文明」から「ほどほど文明」へ

泉　三郎

三・一一以降の生活に、大きな変化が見られる。もっとも顕著なのが「節電」に関するもので、たとえば、私のよく利用する京王電車で、久しぶりに五月の爽やかな風を感じることが出来た。というのは、少し暑いと冷房をかける、少し寒いと暖房にする、がいつの間にか習性になっていて、季節がよくても窓をあけることがなかったからだ。人の集う客室でも同じようなことで、年中窓を閉め切って温度調整をするのがサービスと心得る傾向があった。ところが季節により、その日の状態により、窓は開け放って、緑の風や花の香や小鳥の声を感じる方がずっと風流であり上質のサービスであることに気付いたのだ。

エスカレーターも停止して階段を利用することが増えた。もともと運動不足の都会人のことだから、階段の上り下りはよいエクササイズになる。珍奇な運動器具を買いこんで単純な奴隷的運動をするより、歩くことの方がずっと快適で健康的であることにも気付いた。

それから照明だが、電車内も駅の構内もオフィスも店舗もかなり減光した。最初はちょっと違和感があったが、慣れればそれが当たり前、むしろ明るすぎたことに気付いた。石原都知事の鶴の一声？で、自動販売機が一斉に暗くなり、パーラー・パチンコの看板もやたら自粛ムードになったのもおかしい。

近代文明は「もっと豊かに、もっと便利に」をモットーにやってきた。とくにアメリカ文明がその典型で、日本は戦後そのアメリカを追いかけてきた。しかし、今回の大災害で、「過ぎたるは及ばざるが如し」、何事にも「適度」というものがあり「ほどほど」が一番だと気付いたのではないか。今の日本は、衣食すべて、物も情報も、サービスも過剰である。それをもっと「ほどほど」にして、過小なモラルや礼節、風流や美的感性、こころや思いやりに、その余力を廻すべきだと思う。文明は今や「もっともっと」の「モアモア原理」から、適性適量の「ほどほど原理」へ転換すべき時だと思う。

第59回 全体例会

NPO年次総会に続き、パネル・ディスカッション
大災害から如何にして日本の再生をはかるか？

平成二十三年度最初の全体例会は、五月八日（日）午後一時三十分より国際文化会館講堂で開催された。今回はNPO法人としての年度替りの総会を兼ねるため、二〇一〇年度の事業報告と会計報告および二〇一一年度の事業計画、と収支計画、役員の重任など、発表と審議が行われた。

【第一部　年次会員総会】

総会に先立ち出席者の確認が行われた。正会員数百三十五名、出席者百六名（うち書面表決者七十三名）となり、正会員の半数以上の出席を得て総会は有効に成立した。

まず議長に泉理事長を選出、議事に入った。議題及び審議の内容は以下のとおりである。

■議題

①理事長の挨拶と二十三年度の会の方針について

②平成二十二年度の事業報告ならびに決算承認について

③平成二十三年度の事業計画ならびに収支予算について

④役員重任について

■参照資料の配布

「米欧亜回覧の会」平成二十二年度（二〇一〇年度）活動報告および会計収支計算書（平成二十二年四月～平成二十三年三月）、「米欧亜回覧の会」平成二十三年度（二〇一一年度）事業計画書および会計収支予算書（平成二十三年四月～平成二十四年三月）などの資料が出席者に配布された。（参照資料は二頁と四・五頁に掲載）

■審議内容

①会の設立十五周年の今年度は岩倉使節団百四十周年にもあたり、各部会の活動に加えて、より横断的に今までの活動や研究の成果を、「記念小論集」のような形で纏め、記念事業として世に問うことが出来ればと考える。会員各位のさらに積極的な参画をお願いしたい。

②資料により詳細説明、審議の結果承認された。

③資料と各部会の幹事からの詳細説明、審議の結果承認された。

④以下のとおり承認された。

重任理事（五名）：泉三郎、藤原宣夫、塚本弘、近藤義彦、石垣禎信、重任監事（一名）：楠木孝雄

「米欧亜回覧の会」平成22年度活動報告（2010年4月～2011年3月）

	全体例会	実記・英訳読む会	歴史部会	グローバル・ジャパン研究会	広報メディア委員会	関西支部
2010年 4月	第55回例会（4/24） NPO総会 ブンブンミーティング 米欧亜回覧の会の基本理念と今後の展開	第139回実記読む会（4/8） 阿刺伯海航程ノ記 ★第81回英訳読む会（4/15）	歴史人物シリーズ 「横井小楠をめぐる 幕末英傑群像」 小野寺満憲氏（4/23）	ディスカッション 「日本の現状認識について —長所と短所」（4/28）		
5月		第140回実記読む会（5/13） 紅海航程ノ記 ★第82回英訳読む会（5/20）	「村田省蔵の大東亜戦争」 半澤健一氏（5/11）			第50回例会（5/8）
6月		第141回実記読む会（6/10） 第97巻 錫蘭島ノ記 ★第83回英訳読む会（6/30）	中国歴史ツアー	「激動する世界と日本文化」 服部英二氏（6/3）	ニュース59号（6/15）	
7月	第56回例会（7/17） 「岩倉使節団の群像—歴史 写真からの発見」 倉持基氏	第142回実記読む会（7/8） 第91巻 欧羅巴洲気候及ヒ農業総論 ★第84回英訳読む会（7/15）	第56回例会（7/17） 「岩倉使節団の群像— 歴史写真からの発見」 倉持基氏	服部英二氏の講演に関しての フリーディスカッション （7/12）		第51回例会（7/24）
8月						
9月		第143回実記読む会（9/9） 第99巻 支那海航程ノ記 ★第85回英訳読む会（9/15）	「松野?と松野クララ— 近代林学と幼稚園教育事始」 小林富士雄氏（9/27）	「日本文化の精髄 『比較法』からの発信」 上村達男氏（9/18）	ニュース60号（9/30）	
10月	第57回例会（10/24） 「大国中国とどう向き合うか」 遠藤滋氏	第144回実記読む会（10/14） 第100巻 香港及ヒ上海ノ記 ★第86回英訳読む会（10/21）	「青年・渋澤栄一の欧州体験と その前後」 泉三郎氏（10/15）	第57回例会（10/24） 「大国中国とどう向き合うか」 遠藤滋氏		第52回例会（10/16）
11月		第145回実記読む会（11/11） 第98巻 ベンガル湾航程ノ記 ★第87回英訳読む会（11/18）	「渋澤栄一・壮年時代」 小野博正氏（11/15）	「21世紀に活かす— 文明としての江戸システム」 鬼頭宏氏（11/21）		
12月		第146回実記読む会（12/9） 実記百巻読了記念 忘年懇親会 ★第88回英訳読む会（12/16）	「岩崎四代の生きざま—彌太郎・ 彌之助・久彌・小彌太」 成田誠一氏（12/6）		ニュース61号（12/15）	
2011年 1月	第58回例会（1/20） 「新年懇親例会」 テーマ「中国」	第147回実記読む会（1/13） 「出発」と「アメリカ総説」 ★第89回英訳読む会（1/27）			IT勉強会（1/13）	第53回例会（1/15）
2月		第148回実記読む会（2/10） 第17巻ワシントン市後記 第18巻フィラデルフィア市の記 ★第90回英訳読む会（2/17）			IT勉強会（2/10）	
3月				「科学技術が日本を救うために ～『第4の価値』を目指して」 北澤宏一氏（3/4）		

【第二部　パネル・ディスカッション】

■テーマ

「大災害から如何にして日本の再生をはかるか？」

三月十一日の「東日本大震災」は、世界史的事件、文明的な事故とも言える様相を呈しているが、このような事態に対し我々はどう対処すべきか？この事をテーマに、会員の叡智を集めたパネルディスカッションを実施した。会員の中から、永池榮吉氏（スコーレ協会）、石坂芳男氏（トヨタ自動車）、塚本弘氏（日欧交流会）という、分野の違う三人の方々にパネラーをお願いし、モデレーターは泉三郎理事長が務めた。後半は会場の会員からも活発な質問や意見が続き、当会に相応しい理知的かつ創造的なディスカッションとなった。紙上での再現はむつかしいが、以下のように展開された。

左から塚本氏、石坂氏、永池氏

（敬称略）

【泉】今回の大震災をどのように捉えるか、そして如何にして日本の再生をはかるかをパネラーからお話しいただきたい。

【永池】第二次世界大戦の敗戦に続く、二回目の近代化の挫折と見る。戦後続いた日本の伝統文化の破壊から立ち戻るとき。日本の未来を描いて東北の復興を行う。例えば教育特区。地球規模の視野を持つ日本人をどう育成するかが鍵、そのためにも郷土の歴史と偉人の存在を学ぶ事が鍵となる。

【石坂】グローバリゼーションとの深い繋がり、日本の高齢化問題などが今回の大災害で大きく露呈している。日本型システム（豊かな安定した日本）の終焉、都市部も農村部も、固定した個人の価値観からの脱却が不可欠。「所有からリースへ」に代表されるようなエコロジー社会の実現が急務。平成の開国として、地方への原点回帰の「グローカル」意識での新しい社会・産業の取り組みが日本を再生させる。

【塚本】安全基準・危機管理・エネルギー政策を統合して「原発とどう向き合うか？」が問われている。世界から注目を浴びている今、「世界の中の日本の立場」を主張し説得するチャンスでもある。正確な情報に根拠を添えて伝えること。復興に当たり、政・官の役割分担、特に政治のリーダーシップと決断（リスクテイク）が不可欠。

【泉】日本の各分野を代表するパネラーの分析やご意見に感動と感謝。つづいて会場の皆さんからの質問・意見をいただき、その後にパネラーから回答と共に追加のご意見をお願いしたい。

【会場】活発な質問や意見が続出（八名）。内容はパネラーの回答・意見に含まれるため、ここでは省略。

【塚本】原発は人災、技術についての大きな反省。復興プランの検討部会には多くの若手が参加、アイデアが一杯で若い世代への期待は大きい

【石坂】日本国民としては「エコ生活の覚悟」が不可欠。復興にあたりゴネ得を防ぐに私権の制限はあるべき、復興の設計はエコとのリンクが不可欠となる。

【永池】池田政権以降の経済本位の価値観を見直すべき。見直しの視点は日本型の「個人主義」「国防意識」「家族像」を育むこと、教育の根っこである。

【泉】モデレーターから一言。アメリカを先頭に来た自由経済の限界。征天、克天から順天への大きな選択を迫られているのでは。今までの延長ではダメ。民主主義の中で、いかにリーダーシップを作り上げるかが問われている。最後に各パネラーから「まとめのメッセージ」をお願いしたい。

【永池】戦後的なるものを作り直すべき、「グローバルとナショナル」「選択の自由と自分の責任」のそれぞれの共存を深く追求する。教育の基は家庭、親がどう生きるかが教育。

【石坂】日本のリーダーシップの問題に挑戦すべき、政権交代から新しい日本のアジェンダを挙国一致の内閣で作る。そしてゆっくりとリーダーを育てる。

【塚本】深い反省と考察で新しい日本を考える時、政治家、官僚、実業家がそれぞれの責任でリーダーシップをとる事が再生へのキーとなる。

【泉】大変充実したパネルになった。パネラーと会場の皆さまに深謝。政治の問題は国民の問題、お上に依存しない新しい日本を創るためには、再度「岩倉使節団」を学び「米欧亜」を学ぼう。

【会場】賛同の拍手

（文責）石垣　禎信
（写真）橋本　吉信

設立十五周年記念小論集編集委員会が始動

総会で提起された、設立十五周年記念事業としての「記念小論集」の概要は、多様な形で蓄積されている各部会内で発表された過去の資料、論文などを主たる素材としながら、会員による未発表・新規の論文を加えた記念論文集をまとめることを第一段階とし、さらに、それらを選抜・編集し、新しい論考も加えた「記念小論集」を二〇一二年中に刊行を目指すという二段階のプロジェクトである。

五月二十七日、山田哲司氏（前副理事長・事務局長）を委員長とする編集委員会が立ち上げられ、各部会の資料として蓄積されている素材の発掘・整理を進めると同時に、歴史ツアーなど当会活動の記録などの整理、文書化の検討を行い、当会のアーカイブ作成を試みることを確認した。

それらはホームページの「特別寄稿」欄を仮の保管場所とし、会員も閲覧できるようにする。従って、過去の記名論文、既に冊子となっている文集などがそのまま掲載されることになる。個人情報には充分配慮するが、執筆者、参加者の名前や写真が載る場合があることを予め了承願いたい。（次頁に関連記事）

設立十五周年記念小論集・新規論文募集について

前述の通り、「設立十五周年記念小論集」は、過去の部会発表に関する資料や論文、エッセイなどの掘り起こしにより、執筆者への加筆、執筆のお願いのほか、記念小論集掲載を前提にした未発表論文や新規論文を募集する。テーマは、『実記』に関するもの、使節団に関するもの、近現代史、世界における日本の役割など、当会の設立趣旨や活動内容に沿うものとする。多くの方の執筆挑戦を期待する。また、構想段階の相談や執筆者の推薦も歓迎する。

当面、市販ソフトによる個々の論文の統合を想定しているため、以下のような要領を原則としている。

①パソコンによる文書（WORD、一太郎、テキスト）をメールで送信。宛先は、事務局「十五周年記念小論集」係 info@iwakura-mission.gr.jp

手書きなどその他の原稿は事務局に問い合わせ。

②記名論文で目安はA四十枚前後。

③写真、挿絵、図表などのデータ化、取り込み法等が分からない場合は別送でも可。

④会以外で発表されたもの、文献の引用などがある場合は詳細を明記。

平成22年度 特定非営利活動にかかる事業 会計収支計算書

平成22年4月1日から
平成23年3月31日まで

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

単位：円

科目		金額	
Ⅰ　収入の部			
1　会費・入会金収入			
入会金収入	25,000		
会費収入	625,000	677,000	
2　事業収入			
講演会等事業収入（部会活動収入を含む）	1,045,559	1,045,559	
3　賛助金・寄付金			
4　その他収入			
利息収入他	502	502	
当期収入合計（A）			1,723,061
前期繰越収支差額			2,835,712
収入合計（B）			4,558,773
Ⅱ支出の部			
1　事業費			
（1）講演会等事業費	1,357,878		
（2）会報発行事業費	382,830		
（印刷費）	(261,850)		
（郵送費）	(120,980)	1,740,708	
2　管理費			
電話・通信費	411,684		
会議費	83,160		
事務費	525,363		
人件費	600,000	1,620,207	
3　その他			
書籍購入費	94,080	94,080	
当期支出合計（C）			3,454,995
当期収支差額（A）―（C）			△1,731,934
次期繰越収支差額（B）―（C）			1,103,778

平成23年度 特定非営利活動にかかる事業 会計収支予算書

平成23年4月1日から
平成24年3月31日まで

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

単位：円

科目		金額	
Ⅰ　収入の部			
1　会費・入会金収入			
入会金収入	50,000		
会費収入	650,000	700,000	
2　事業収入			
講演会等事業収入（部会活動収入を含む）	1,200,000	1,200,000	
3　賛助金・寄付金			
4　その他収入			
利息収入他			
当期収入合計（A）			1,900,000
前期繰越収支差額			1,103,778
収入合計（B）			3,003,778
Ⅱ支出の部			
1　事業費			
（1）講演会等事業費	1,200,000		
（2）会報発行事業費	350,000		
（印刷費）	(250,000)		
（郵送費）	(100,000)	1,550,000	
2　管理費			
電話・通信費	360,000		
会議費	60,000		
事務費	400,000		
事務委託費	360,000	1,180,000	
3　その他			
当期支出合計（C）			2,730,000
当期収支差額（A）―（C）			△830,000
次期繰越収支差額（B）―（C）			273,778

歴史部会報告

担当幹事　小野 博正
mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■幕末から終戦まで、木戸孝允と木戸幸一（講師：芳野健二氏）

四月十八日開催、出席者十五名。

大地震という天災と、収斂定かならざる原発事故という人災に苦しむ今、百五十年のわが国の歴史を幕末・維新（陰を伴った成功例）と、昭和の十五年戦争（完全な失敗例）というふたつのピークを振り返ってみることも意義あることではないか。前者では、ペリー来航という天災（？）と、対応不可なる幕藩体制という人災、後者では、関東大震災という天災と、軍閥跋扈という人災にどう対応したかを、二人の木戸、木戸孝允と木戸幸一（戸籍上の孫）を狂言まわしとして。二人の政治的立ち位置が、時の絶対的権力者たる大久保、東条に対する、あるときは協力者、あるときは厳しい批判者として共通であり、ともに若き明治帝と昭和帝の厚い信頼をえていた。

また二人の共通項たる緻密なる日記『木戸日記』『木戸幸一日記』をよむなかで、当時の両者の苦悩を共有した。そして二つの時代を俯瞰する意味で、約百人のキーマンの歴史的洞察力と人格・品性を「独断と偏見」にもとづき大胆に採点してみた。（各位には、独自の知見で採点を試みられたし！）

・高得点

斉彬、龍馬、諭吉、萬次郎ら、是清、斎藤隆夫、石橋湛山、今村均、井上成美ら

・低得点

久光、山県ら、田中義一、近衛、松岡、東条、服部、辻ら

さらに前者では「維新のグランドデザイン」を描いた横井小楠を、後者では、泥沼戦争に警告を発しつづけた桐生悠々や加納久朗の論旨をみてみた。またこの両局面で、海外経験とその行く先がその後の政治的立ち位置に大きく影響を与えていることに気づいた。

（文責）芳野　健二

■西郷南州が残した日本精神の記憶（講師：小野寺満憲氏）

五月十六日開催、出席者十二名。

拙くとも徹底して西洋、近代に対峙し戦い抜いた記憶を持つ国民と、持たざる国民とでは自ずからその未来の差は、明らかであろう。そのためにこそ必敗の戦いを選んだのだ。事の成否を問わず、ある崇高な理想のために命を捧げた人々が、わが国の歴史には度々登場する。楠木正成あり、吉田松陰あり、そして大東亜戦争での特攻隊員たちが居る。西郷とその弟子たちも、その系譜に連なっているのである。

明治維新は、武士階級が自らを消滅させた、世界史的にも稀有な出来事であった。それを、西郷は演出した。映画トム・クルーズの『ラスト・サムライ』は、その西郷の武士道精神を余すことなく世界に伝えている。

主君・島津斉彬により取り立てられ，斉彬に「天性の大仁者である」と言わしめた、西郷の「敬天愛人」は、薩摩独自の郷中教育で育まれ、苦役する農民達との接触や、奄美大島、沖永良部島、徳之島での３回にわたる離島生活で醸成された。流刑中に、彼は八百冊もの書籍を読破している。漢詩もよく書いている。西郷の政治哲学は、死後，旧庄内藩の人々によって『南州翁遺訓』に残された。

西郷の目指す国家の理想像は「外には道義を持って立ち、内には道義が行われる」道義国家の建設であった。遺訓の中に「国民の上に立つものは、いつも自分の心をつつしみ、品行を正しくし、偉そうな態度をしないで、ぜいたくを慎み節約することに努め、仕事に励んで一般国民の手本となり、一般国民がその仕事ぶりや、生活ぶりを気の毒に思うくらいにならなければ，政令はスムーズに行われないものである。ところが今、維新創業の初めというのに、立派な家を建て、立派な洋服を着て、きれいな妾をかこい、自分の財産を増やすことばかり考えるならば、維新の本当の目的を全うすることはできないであろう。今となって見ると戊辰（明治維新）の正義の戦いも、ひとえに私利私欲をこやす結果となり、国に対し、また戦死者に対して面目ない事だと言って、しきりに涙を流された。」とある。西郷は新政府の、取捨選択でなく何でも模倣の欧化政策には、懸念と不満を覚えていた。岩倉使節団帰国後に、彼の朝鮮使節派遣論で確執が生じ、西南戦争を招くことになったのは、その政治姿勢の違いにあった。

武者小路実篤は、西郷論で「西郷は、自分のことを考えず、日本国と日本人のことを常に考えた。彼は招かれないと出ない男でが、頼られると感動しやすい男で、身を投げ出して引き受けた。それが西南戦争を生んだと言える」そんな南州論を語った。

（文責）小野寺　満憲

平成23年度事業計画書
平成23年4月1日から
平成24年3月31日まで

1　事業実施の方針

平成２３年度は、事業の中心を講演会、部会活動、会報（ニュース）発行の3本柱とする。

2　事業の実施に関する事項

事業名	事業内容	実施予定日時	実施予定場所	従事者（NPOスタッフ）の予定人数	受益対象者の範囲と予定人数	支出見込額
講演会	講演会年6回、交流・交歓会年1回	5月、6月、9月、10月、11月、1月	国際文化会館他	各回　5～10名	一般市民：講演会（各回）約50名、交流・交歓会90名	120万円
部会活動（注）	研究及び啓発活動	部会により毎月又は年4回	国際文化会館他	各回　3～5名	一般市民：各回約25名	上記に含む
会報発行	会報発行による研究・啓発活動	季刊（年4回）	事務局他	各号　5～10名	一般市民：各号約500部	36万円

注）　部会とは、下記の7部会のことを言う。

・「実記」を読む会
・「英訳実記」を読む会
・歴史部会
・グローバルジャパン研究会
・関西支部
・広報/メディア委員会
・15周年記念小論集編集委員会

実記を読む会報告

担当幹事　桑名 正行
Tel&Fax 03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百四十九回

三月十日、出席者九名。

第三巻桑方斯西哥ノ記上

第四巻桑方斯西哥ノ記下

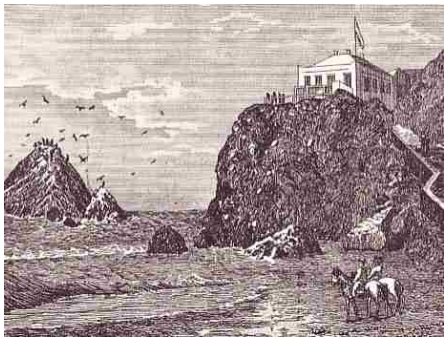
まずは冒頭の「此暁ハ、咫尺モ辨ヘヌ程ノ深霧ニテ……」以下を、一九九〇年のNHK市民大学講座「岩倉使節団の西洋見聞」での芳賀徹先生の朗読で聞く。二十四日間の航海を終えてようやくSan Franciscoに到着した喜びと安堵感、感激と感動、興奮と高揚感、使命感と好奇心、期待と戸惑いなど一杯の文章が続く。

米欧回覧実記の紹介で必ず引用されるのが「ガラントホテル」の部分。ここの記述は観察の鋭さと驚きとで読者を引きつける。一行の宿泊先は、「ガラントホテル」(Grand Hotel)となっているが、「泰使欧米日記」には人数が多いので、文部省関係者と生徒は「オキシテンタールホテル」(OccidentalHotel)、司法省関係者は「レッキハウスホテル」(Lick House Hotel)に分宿したと書いてある（久米邦武文書）。以後十二月二十二日までの十七日間、一行はSan Francisco市挙げての歓迎を受ける一方、Kimball Carriage Factory、MissionWoolen Mills、馬具製造所、PacificMail Steamship Company、Landsbergerワイナリーのほか、Denman（実記には「ランマン」と書いている）女学校はじめ、小学校、兵学校、私校、盲唖院、大学校を文字通り寝る時間も惜しんで見て回る。

San Francisco市の岩倉使節団歓迎委員会を実際に実質的に取り仕切っていたのはBank of California の創立者William C. Ralston（実記には「ラルストン」と書いてあるが、水沢周氏と泉三郎氏の著書では「ロールストン」。

一八七二年一月三十日付の大久保利通と伊藤博文がサインしたBank of California向け書簡が三菱東京UFJ銀行San Francisco支店に展示されている。Grand Hotelや一行の訪問先はほとんど全てRalston傘下の企業。十六日、Ralston氏の招きをうけて鉄道でBelmontへ。米人七十人を加え総勢百六人の大パーティがRalston邸で開かれる。一行は、その豪華さに驚く。

（文責）鵜飼直哉


クリフハウスの風景（『実記』）

■第百五十回

四月十四日開催。報告は次号掲載予定。

■第百五十一回

五月十二日開催。

『第八巻　市高俄鉄道の記（シカゴ鉄道の旅）』

『第九巻　市高俄より華盛頓府鉄路の記（シカゴからワシントンへ）』

日本の農業問題

日本の農業は、農地の集約など生産性を高めることを怠り、非農業部門からの間接的直接的金銭的支援に頼ってきたが、政策次第で、自由化に耐えられる強い農業を築くことが出来る。

南北戦争（The Civil War, American Civil War, War between the States)

Time Magazineは今年の四月十八日のUSA版の表紙にリンカーンの涙している像を載せ、百五十年経ってもまだ南北戦争をしていると嘆き、南北戦争の真の原因をめぐりまだ戦っている現状にリンカーンが涙していると訴えている。奴隷制の是非が南北戦争の真の原因なのに、これを認めない一部勢力が今もいる。このことを、リンカーンは嘆いているのだ。

奴隷制度がもし西部諸州にも広がっていれば、米国は世界で孤立していただろう。ロシアは一八六一年には農奴を解放していた。また、一時カナダから南アメリカにまで広がっていた奴隷制は、一八〇八年までにはブラジルとキューバと米国だけに生き残っていた。自由を掲げて最初に創られた国が、地球上で奴隷経済に支えられている最後の国になる危険があった。

世界史的に見れば、建国の理念がどうであれ、奴隷制が公然と認められていたような国家を近代国家と呼べるのか。その意味では、南北戦争は、アメリカが名実共に近代国家に変わる「市民革命」だった。

南北戦争は全面戦争と呼ばれる現代戦争の最初のものだった。ナポレオン型との決別をし悲惨な戦いになった。

開戦の時点でのアメリカの人口。北部の人口は約二千二百万、南部の人口は約九百万（このうち黒人奴隷は四百万）。双方で、六十二万人を超す死者を出した。

（文責）小坂田 國雄

英訳実記を読む会報告

担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp

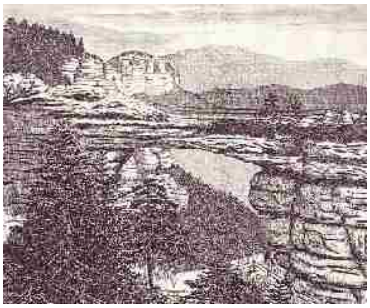
■第九十一回

四月二十一日開催。Chapter 70（北ドイツ後記上）

とても美しいドイツの自然の描写や、歴史、航路等の記述が印象深かった。久米がcollegeを諸団体の所を学校と誤訳して、関係ない学生が登場したり、ここでも久米は間違っていると指摘されている箇所が多く気になった。女性のファッションに関する供述も興味深く、あの時代なら、驚くのも当然かなと思った。

本当によくここまで観察し、私達に伝えてくれていると思う。勉強不足で申し訳ありません。これから心を入れ替えて勉強しなければと思っている。

（文責）森本 麗千子


ザクセン山中の自然橋
（『実記』北ドイツ）

■第九十二回

五月十九日開催、出席者七名。

Chapter 71（北ドイツ後記下）は一八七三年五月四日から五日にかけての記録で、原文の岩波文庫版でも英訳版でも銅版画を除いて約十四ページで、フランクフルト・アム・マインの公園や動物園、紙幣印刷所の見学などの記録もあるが、ほとんどがザクセン諸国の歴史やガイドブック的解説である。

英訳者のつけた注五によると、ザクセン・ワイマール大公国の議会選挙権について、久米はThe Statesman's Year-Book (1870), p. 142を参考にした際、"ven ladies being allowed to vote."のevenをelevenと読み違えたらしく「貴族ノ婦人、撰権ヲ有スルモノ十一名アリト云、」（岩波文庫　二百二十一ページ）と誤記している。

比較的短い章で、報告者の準備不足もあって、いつもより早く終わり、寄り道をするのにも、早めに帰宅するのにも好都合であった。

（文責）三原　浩

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事　石垣 禎信

pms-tokyo@m4.dion.ne.jp

■今こそ、日本の文化力を世界に発信しよう！

第五回グローバルジャパン研究会は、文化庁の長官、近藤誠一氏を招き、六月一日、国際文化会館で開催された。

テーマは「今こそ、日本の文化力を世界に発信しよう！」で、外交官として経済や広報にも強く、ＯＥＣＤ事務次長、ユネスコ大使など国際機関での体験もあり、そして海外体験が長く、多くの著作をもつ文化人としての背景から、たいへん貴重なお話を伺うことができた。

まず、最初に日本の国力について、ＧＤＰ、競争力、平均寿命、住みよき国指数などから、世界でも最上位にランクされることを述べ、客観的データと日本人の主観とのギャップについて分析、戦後の経済成長の成功体験、経済偏重による文化軽視、それが予算や寄付、個人の時間配分にも現れているとの現状が示された。

次いで　日本には豊かな文化遺産があることを人材、有形無形の文化遺産、そして文化財保護法などの法的枠組みに言及し、さらにはリチャード・フロリダ教授（ジョージ・メイソン大学）のクリエイティビティ・インデックスでは日本が世界二位にあることを披露された。これには自己表現力が非常に低評価であることもあって、驚くべき高評価であった。

周到に準備された資料をパワーポイントで解りやすく解説されたため、参加者はよく理解することができ、日本が客観的に見て世界でも有数の素晴らしい国であることを認識することができた。

では、どうするか。問題は個々の文化的価値はあっても、国民がそれを意識してないこと、個々がバラバラに存在していてシステムとしてつながらないこと、それを生かす制度になってないことなどが指摘され、観光と文化遺産の連結も注目すべき点だとされた。つまり文化資源を国の力につなげるシステムの構築―アート・マネジメントが必要であると強調された。

次に、日本の文化の魅力の根源は何かという点について、日本人の自然観、「あいまいさ」の受容、強い平和志向と他文化の絶えざる導入と洗練化、の四点を挙げ、桜とバベルの塔、能の「屋島」とアニメの顔なし、能の「敦盛」と平泉、東福寺と茶道などを例に説明された。

そして最後に、これをどう発信するかについて、人の交流が一番大事だとし、その障害になっていることを除くこと、いろいろの交流プログラムのさらなる推進、例えばアーチスト・イン・レジデンスなど。また、インドネシアから招いた高校の先生が「比叡山の森に日本人の精神の原点がある」と感想を述べたことが披露されて感銘を与えた。

（文責）小松　優香

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第五十四回

五月十四日開催、出席五名。

輪読は第二巻の「倫敦府の記」冒頭から。

東日本大震災に我々も大きな衝撃を受け、冒頭で地球物理の研究に携わっておられた会員の平山氏に巨大地震の発生メカニズムであるプレート・テクトニクスについてお話を頂いた。地表に露出しているプレートの境界がサン・アンドレアス断層（カルフォルニア州）を実際に観察された話などを聞いた。

もう一つのテーマとして、かつての巨大地震や津波の震災が、幕末の動乱を始めその時の社会にどのような影響を与えたかを歴史的視点で考えてみることにした。結論は、大震災は、一．社会の変化の方向を変えることや、変化そのものを起こす原因になることはない。二．但し、社会の変化を加速化する、つまり社会がある方向に動きだした変化のスピードを速めることはある。　三．震災のため偶発的に発生した事象が社会に影響を与えたことも無視できない。ということであった。

（文責）難波　康熙

使節団関連書籍紹介

伊藤博文の青年時代―欧米体験から何を学んだか（泉三郎著・祥伝社新書）

維新革命に身を投じ、新政府の高官に駆け上がり、三十一歳で副使の一人として岩倉使節団に参加するまでの青年時代。そして、使節団において条約改正交渉失敗の当事者となった米国体験と多様な国々が独自性を確保しながら近代化に対峙している姿に触れる欧州回覧。

明治国家の理念と制度をつくった稀代の大政治家の資質が形成されていく前半生に焦点を合わせ、現未来のリーダーたちにメッセージを感じてもらいたい人物伝である。

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2011年7月～9月の予定です

☆7月全体例会

日　時：7月23日（土）　13:30～17:00
（第１部）全体例会　13：30～14:15
（第２部）講演とディスカッション　14：30～17:00
テーマ：簡素なる国へ、政治をどう変えるか
講　師：中村敦夫氏
作家、俳優、元参議院議員、
日本ペンクラブ理事
場　所：日本プレスセンター９階会議室
会　費：2,000円、学生1,000円

☆実記を読む会

日　時：7月14日（木）　14:30～17:00
9月15日（木）　14:30～17:00
場　所：国際文化会館Cルーム（会費1,000円）

☆英訳実記を読む会

日　時：7月21日（木）　18:30～21:00
9月15日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館 402室（会費1,000円）

☆歴史部会

日　時：7月19日（火）　18:00～21:00
「山縣有朋」（永冨邦雄氏）
9月20日（火）　18:00～21:00
「伊藤博文」（泉三郎氏）
10月17日（月）　18:00～21:00
「フルベッキ」（岩崎洋三氏）
11月21日（月）　18:00～21:00
「岩倉具視」（山田哲司氏）
場　所：国際文化会館（会費1,000円）

☆グローバルジャパン研究会

第６回は、上記の７月全体例会第２部となります。
なお、先の幹事会で、休眠中の現未来部会は、今後、グローバルジャパン研究会と合体することになりましたのでお知らせします。

☆関西支部例会

日　時：7月23日（土）　13:00～16:30
場　所：大阪弥生会館

編集後記

◇設立五周年（二〇〇一年）および満十周年（二〇〇六年）に記念事業として国際シンポジウムを開催し、それぞれ報告書が出版されています。十五周年となる今年度の記念事業は、会員による小論集を作成することになりました。第一段階の作業は、各部会内で発表された資料や論文の検討・整理です。

◇現在まで、実記を読む会は百五十回、英訳実記を読む会は九十回そして関西支部も五十回を超える定例会が続いています。また、歴史部会、グローバルジャパン研究会（現未来部会）も研究・議論を重ね、それぞれの成果が多様な形で蓄積され、質の高い素材は十分にあるはずです。個人が保存している資料や論文等があれば、事務局・編集委員にご連絡ください。小論集は、過去の論文の作成者に加筆・推敲をお願いするとともに、新規に募集する論文も加えて編集されます。

◇たとえ記念小論集に掲載されない資料・記録であっても、当会の活動を集大成するアーカイブの重要な資料となります。その保管庫としてホームページ「会員のページ」活用を試み、作成初期の段階から可能な限り公開をしていきます。（N）